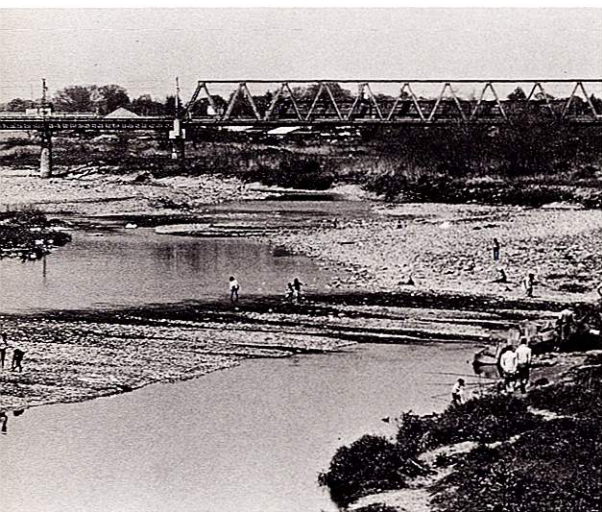


かつて、武蔵野特有の雑木林や畑の緑でおおわれていた福生市も、その後の発展はめざましく、宅地化が急激に進みましたが多摩川をはじめ、玉川上水、分水、湧水とその沿岸周辺や河岸段丘などに、武蔵野のおもかげをいまなおしのぶことができます。

# 武蔵野のおもかげを求めて。

## 生い立ちをしのぶ

昭和30年代をさかいに驚異的な変貌をとげた青年都市福生。その躍進の礎となっている自然風土、文化、社会環境などは、原始の昔からこの地に住み継いできたたくさんの祖先の人たちによって築きあげられたものです。



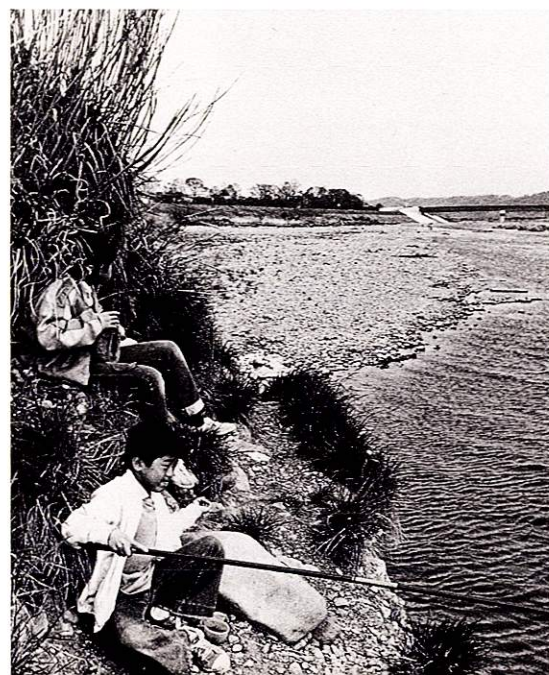
『新編武蔵風土記稿』によれば、福生村は東は中里新田および殿ヶ谷戸村、南は熊川村、西は多摩川をへだてて下草花村、北は川崎・石畑両村に接し、東西およそ30町、南北22町ほどありました。そして、正保の頃はすべて畑地でしたが、文政の頃になると水田も若干開拓され、民家222軒、農業の合い間に筏<sup>いかだ</sup>を作って多摩川に流し、漁業も営んでいました。

一方、熊川村は多摩川段丘上に発達した村のため、

耕地はほとんど畑でした。水田を開発するには、多摩川の川原を利用する以外に方法はなく、若干川向の対岸に水田を切り開いていました。対岸に水田を耕しに行くことは当時、めづらしくなく、川向の高月村、小川村、滝村などから熊川村への畑の出作があったことと同じです。

熊川村では、その後も新田開発が続きましたが、多摩川の氾らんにはたびたび苦しめられました。そんな村に本格的な開発事業が着手されたのは、明治以後のことでした。

江戸時代、代官、旗本の支配下にあって、それぞれ独立村であった福生村と熊川村が、組合役場を設けて事務の共同処理にあたったのは明治22年。それ以後50年にわたって組合役場が続き、昭和15年両村が合併、町が誕生しました。そのときの人口は7,921人を数えました。そして、昭和45年7月、人口3万8,749人をもって市制を施行したのです。



## 武蔵野のおもかげをのこす玉川上水

江戸市民に飲料水を給水しつづけた玉川上水の美しい流れも、近年水資源が枯れてきたため水量が減り、だんだん昔のおもかげを失いつつあります。



玉川上水の開削は、今から約330年まえ、玉川庄右衛門・清右衛門兄弟によって行われたといわれます。これは、近世史上における画期的な一大土木事業であったため、いろいろなエピソードが今日に伝えられています。そうしたエピソードのひとつに、“水喰土<sup>みずくらんど</sup>”という地名のおこりがあります。これは、拝島駅から牛浜駅方向の線路に沿って、現在の玉川上水の西側一帯をさす地名です。言い伝えによれば、最初の工事が失敗して、福生から掘りはじめ、水を流したところ、この地点で水がことごとく地中<sup>みづくらんど</sup>にのみ込まれてしまいました。このために、このような地名が生まれ、そして空堀が今にのこされたのだそうです。

